かささぎ 通信 第50号

2016年11月11日　発行

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」

二〇一六年十月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和9年11月号初出の「猫の子」「弟」を読みました。
（「弟」は『森三郎童話選集　夜長物語』所収）

「猫の子」（森三郎名義）は、主人公・道代の家のミケが産んだ小猫にまつわる話です。

生まれた五匹の小猫が一匹一匹ともらわれていき、最後に残った、一番やんちゃで滑稽なので「チャップリン」と名付けられた小猫は、たまたま道代の家にやって来た女の子に引き取られることになりました。道代の家族は一か月前に引っ越してきたばかりですが、その女の子は、それを知らずに、以前ここに住んでいたおばさんを訪ねてきたのでした。

この話の眼目は、ユーモアということでしょう。小猫をもらった女の子が猫のことを手紙で知らせると言うので、道代が住所を教えようとすると、「大丈夫、ちゃんとしってるわよ。」「なぜ？」「だって、このお家、元あたしのおばさんの家だったんですもの」。と二人の少女が笑いあうという落ちがついて話は終わっています。

いつもの森三郎童話の、場所は特定できないけれど、懐かしい田舎の風景を描いた作品とは違い、「猫の子」の舞台は、東京の「東洋キネマ」という映画館、玉川電車とか、渋谷、世田谷、道玄坂という具体的地名など、ちょっとしゃれた雰囲気を出しています。しかも、最後は「さようなら。・・・チャップリンさよなら。」と小猫に声をかけて終わっているのです。

小猫の名前にも映画の好きな三郎さんならではの感じが出ています。

先回の「かささぎ通信」第49号でも、子どもにも分かる「健康な笑ひにみちびく作品」を書こうという、森三郎さんの思いを紹介しました。昭和9年10月号の「鼻」、11月号「猫の子」と二か月続けて滑稽を主眼とする作品を発表していると言えます。毎月二作、三作と作品を発表していると、ある一つのテーマ、素材で書きためていくという創作姿勢が生まれるのでしょうか。

「弟」（小松淑郎名義）は、「猫の子」に比べて、胸の詰まるようなつらい話です。

五年生の浩吉と三年生の弟の豊ちゃんは八百屋さんの息子です。夏休みにお母さんが湯治のために温泉に出かける時、浩吉か豊を連れて行くことになり、どちらを連れて行くか、二転三転して浩吉が一緒に行くことになりました。豊ちゃんはその後でお父さんと一緒に海に行くことに決まっています。浩吉は、ひ弱な浩吉を鍛えようとするお父さんがこわいので、お母さんと行けることを喜んでいました。ところが、温泉に行って四日目に電報が来て、急いで帰宅すると、豊ちゃんが急病になっていてその晩亡くなってしまったのでした。いただいたパイナップルをみんなで食べた時、種を食べてしまったのが原因だったというのです。浩吉は「もし豊ちゃんがお母さんと一緒に行っていたなら死なずにすんだのだ」と、我が身と弟の立場を変えて考え、「言うに言われない変な気持」になるのでした。

この童話では、弟の豊ちゃんは、勝気でしっかり者の二年生という描写だけで、お母さんと一緒に行けなかった寂しさというような、豊ちゃんの心情は描いていません。「死」の愁嘆場を見せるのではなく、ことによったら自分が死んでいたかもしれないと想像する五年生の少年を描くことで、森三郎さんは、「死」は自分に無縁のはるか遠いものではないということを伝えたかったのかもしれません。

次回予定　平成28年12月9日（金）午後1時～3時

『赤い鳥』昭和10年1月号初出作品「暗黒太陽」「水差」「祖母」
（「祖母」・・・『森三郎童話選集　夜長物語』所収）